書評

Boulnois Olivier, *Métaphysiques Rebelles: Genèse et Structures d'une Science au Moyen Âge* (Presses Universitaires de France, 2013, 424p.)

林　拓也

本書はオリヴィエ・ブルノワ（高等研究院教授）による形而上学史研究書である。著者は、J.-L.マリオン、J.-F.クルティーヌらが退官した現在、フランスの形而上学史研究を担う代表的哲学者の一人である。本書を構成する全十章のうち四つの章（第一、二、八、十章）は本書のために新たに執筆されたものであり、その他の章は既刊行の諸論文を改稿したものである。前著（*Être et Représentation: Une Généalogie de la Métaphysique Moderne à l'Époque de Duns Scot (XIIIe–XIVe siècle)*, 1999）において提示された形而上学史観を大まかには継承しつつも、本書の目論見は前著のそれとは異なる。形而上学の「歴史化」ないし「考古学化」と著者が呼ぶ運動に位置づけられる本書が目指すのは、「形而上学が中世において、多様で、かついかなる抽象的な体系化にも反抗する複数の途によって絶えず展開された」ことを示すことであり、そこに本書の題目は由来する。ただし、形而上学のこの系譜学（généalogie）は、単なる歴史家としての関心によるものではなく、概念の分析・結合とは異なる仕方で形而上学を再び基礎づける可能性を探究する試みである。

本論は二つの部から構成され、第一部は形而上学の「生成（genèse）」、第二部は「諸構造（structures）」に捧げられている。第一部第一章では、古代新プラトン主義者たちにおけるアリストテレス思想の受容と再解釈が扱われる。そこでは神学的側面が前面化したが、同時に生き方という倫理的な観点も取り込まれたこと、そしてそれは中世初期のキリスト教哲学でも同様であることが主張される。第二章では新プラトン主義哲学を継承したアラビアの思想家（特にアル・キンディ、アル・ファーラービー、アヴィセンナ）における哲学的神学とムスリム神学「カラーム」との間の関係が論じられる。

以上の第一部に続いて、第二部では、中世の個々の哲学者の考察に先立って、まず形而上学の三つのモデルが提示される（第三章）。この章は、形而上学の歴史に現れる無数の立場と、形而上学には唯一の本質しかないという単純な見方との両極端の中間にある途を模索するものであり、本書の要となっている。ここで形而上学の歴史を単純化するものとして批判されているのは、ハイデッガーによる「存在-神論（onto-théologie）」の概念である。これはアリストテレス『形而上学』の諸巻における「第一哲学」の二つの規定の関係を巡る問題の解決のためにハイデッガーが作り出したものだが、ブルノワによればこの概念はあまりに漠然としており、形而上学の歴史

を解明するには不適切である。実際には、中世ラテン世界の形而上学は、ギリシャ、ラテン、アラブという異なる思想的源泉に依存しており、そうした源泉の相違から、形而上学の極めて多様な解釈を漸次的に形成したのである。しかしながら、筆者はそうした多様性をつぎの三つのモデルへと分類することを提唱する。すなわち（1）明確に神学的なモデル：神学と至福（félicité）としての形而上学；(2）混合的モデル：アナロジー、曖昧性、開き（ouverture）；(3）超越範疇モデル：超越範疇（le transcendantal）、一義性、一般形而上学と特殊形而上学の分岐。著者によれば、「存在-神論」はただ第三モデルにしか対応しない。三つのモデルの順序は、中世形而上学史の歴史的な進展に概ね対応しているものの、例外を認めぬものではないことは本書結論部で強調されるところである。

第一の、明確に神学的なモデルは、大まかに第一章と第四章で扱われている。神学的なものとしての形而上学解釈は、新プラトン主義の影響下で、間接的にはギリシャ・ラテン教父を介して、直接的にはボエティウスを媒介として形成された理解である。第一モデルから第二モデルへの移行において決定的な重要性を持つのがアヴィセンナだという。ガンのヘンリクスやドゥンス・スコトゥスへの影響はよく知られているが、それに先立ちラテン世界での「形而上学（metaphysica）」というタームの初使用を基礎づけたのも、アヴィセンナの形而上学定義であった。事実、アヴィセンナ著『神的学』の翻訳者グンディッサリヌス（1181年没）こそが、「形而上学」というタームをアリストテレスの書物のタイトルではなく、至高の学を指し示すものとして初めて用いた。すなわち彼はもはや自然学の後に来る書物のタイトルではなく、自然の後（post naturam）にある事柄を扱う学を形而上学と名付けたのである。ついでブルノワは、ロジャー・ベーコンとアスポールのジェオフリー（1257年頃）の名を挙げた後、存在者と神という二つの対象の間で引き裂かれた形而上学の統一性を保証するために存在のアナロギアの概念が登場したことを確認する。そのうえで、アルベルトゥス・マグヌス、トマス・アクィナス（、さらにはエックハルト）における第二モデルの展開が追われる。著者によれば、第二モデルに固有のアナロギアの図式は存在者の共通性と第一性（神性）を同時に考えることを可能にする。すなわち、「形而上学の主題は共通的に言われる[有限な]存在者であるが、存在者が共通的に言われるのは、存在者がまずもって第一の存在者すなわち残りの一切の普遍的な原理について言われるからでしかない。」このように、アナロギアによって神的な学と普遍的な学の統一性が保証されるがゆえに、第二モデルは *théo-ontologie* あるいは *katholou-protologique* と呼ばれうる。

第三のモデルも第二のモデルと同様、共通的存在者と神的存在者を同一の学の内部で両立的に考察する困難（「アヴィセンナの

アポリア」）から現れるものである。第二モデルと異なり、形而上学の主題の第一性は完全性の順序においてよりもむしろ知解の順序において理解され、また、神的存在者へ至るリアルな抽象よりも共通的存在者へ至る概念的な抽象が優位となる。その結果、形而上学の主題はもはや原因から存在を受け取る有限的存在者ではなく、存在者一般であり、神もその内に含まれることになる。ただし、こうした存在者一般はリアリティにおいてではなく、ただ概念の内でのみ到達可能なものであるという。このモデルをまず体現したブラバンのシゲルス、ガンのヘンリクスについで、スコトゥスによる、*scientia transcendens* (*science transcendantale*) と *scientia specialis* たる哲学的神学との区別が扱われ、この区別にもかかわらず、スコトゥスはこれらを同一の学の二つの部として論じることによって、伝統的な三つの理論的な学に替わる四つの理論的な学という帰結を避けたことが確認される。大きな一歩を踏み出すのが、マルケのフランソワであり、彼は共通的形而上学と特殊的形而上学を二つの異なる学として区別する（*Duplex est metaphysica*）。そこでは二つの学が絶対的に別個であることは否定されつつも、絶対的に同一であることも否定された。以上の三つのモデルの背景には、哲学と啓示の関係の問題があったという。

残りの七つの章は各モデルを体現する個々の哲学者のより詳細な分析に充てられる。第四章では 13 世紀前半の第一モデルが別の観点から再び論じられ、第五章では、20 世紀にトマス哲学に対して向けられたハイデッガーとアンソニー・ケニーの批判に応答するべく第二モデルが詳述される。ハイデガーが批判する如く、物質からの分離・普遍性・原因性の間には不整合はなく、それらの統一性は啓示神学という外的根拠によるものではない。また、確かにケニーの言うように存在の複数の意味の曖昧性はあるが、それはアナロジーの概念によって完全に引き受けられているのである。

第六章によって明らかにされるのは、近世スコラ形而上学を特徴づける統一性、神学および自然的諸学に対する自律、超越範疇的性格は中世に遡るものであり、すでにヘンリクスにその萌芽が認められるということ、さらには形而上学の認識（noétique）への依存が準備されたということである。

第七章ではスコトゥス形而上学に 50 頁強が割かれている。まず精妙博士の学の理念が叙述される。つぎに、三命題（１．求められている学は存在を対象とする。２．ある類である主題についてしか学はない。３．存在は複数の意味で言われるがゆえに類ではない。）の両立不可能性という「アリストテレスのアポリア」を解決すべくスコトゥスが展開した三つの説が、発展史的に分析される。最後に、上述した四つの理論的学の拒否という問題を通じて、残りの諸章へと途が開かれる。

14 世紀のスコティストを扱う第八章では、すでに見たマルケのフランソワによる

決断、マイロンヌのフランソワの形而上学における矛盾律の射程に続いて、ニコラ・ボネにおける「自然神学の創出」が研究される。マルケのフランソワに第四の理論的学を見ていたボネは、第二の形而上学を特徴づけるために「自然神学」の概念（アウグスティヌスのものとは意味が異なる）を創出したのであった。

第九章は L. ホンネフェルダーらに続いて、従来軽視されてきたノミナリスト形而上学の可能性を検討する。スコティスト的実在論とオッカム的唯名論の相違は形而上学のアプローチの相違をもたらすが、その限界、構造、可能性の条件に関しては、両者は連続的であるという。

最終章「オントロジーの生誕」において、著者は 15 世紀に再燃した形而上学の対象のリアリティを巡る問いの確認から始め、ペレイラからゴクレニウスへと連なる、リアルな存在者を対象とするオントロギアの伝統と、ティンプラーからロルハルドゥスへと受け継がれる、理拠的存在者をも含む表象可能なものを対象とするもう一つのオントロギアの伝統を区別する。スアレスはこれら近世オントロギアの直接的起源ではない。

結論部では以上の諸点に加え、自然神学とオントロギアの誕生が、形而上学と啓示神学の対抗関係を制限する傾向の中でなされたこと、また近世スコラの問題圏は中世に産み出されたものであって、17 世紀初頭の「オントロギア」の新しさはその名称のうちにしかないことが補足される。そのうえで著者は、西洋形而上学について一般に受け入れられている九つのテーゼを反例によって反駁する。本書評でまだ言及していない論点に限定するならば、形而上学のロゴスは排他的にギリシャ的ではない；存在忘却、すなわち存在の諸存在者への還元という現象は、思惟対象として神が現れることと相関的ではない；トマスにおける神と存在の同一視は聖書が起源ではなく、まず新プラトン主義的な主張である。

本書で提示される論点の多くは、前著その他においてすでに示されていたものであり、本書の独自の価値は、ブルノワ自身による古代哲学、アラビア思想、中世初期における、問題の起源の探究；スコトゥス形而上学の発展史的考察；14 世紀スコティストの重要性の強調；ノミナリスト形而上学の可能性の問いに対する、形而上学の構造・モデルという観点からの応答；思想系譜の歴史的調査によるスアレスの地位の相対化等に見出されよう。既刊行の諸論文をもとにしているため、解釈の整合性が一部明確でない点、また本書への採録に際してラテン語原文がほぼ削除された点は多少残念であるが、三つのモデルを軸としながら中世形而上学の多様性を描き出すという本書の目論見は成功していると言えるだろう。本書を土台として中世さらには近世のスコラの多様な形而上学の研究が進展し、近世の「大哲学者たち」の思想的背景がいっそう明らかにされることを期待したい。